

図 書 紹 介

Istilah Ekonomi, Inggeris-Melayu-Inggeris. (Siri Istilah DBP Bil. 3.) Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1965. 151 p.

マレーシア政府の教育省の中にある、言語文学局の経済用語専門委員会が編纂した経済用語集である。マレー語—英語、英語—マレー語の二部からなり、どちらの語からでも、対応する用語を見つけ出せるようになっている。この言語文学局では、すでに *Istilah Jawatan dan Jabatan* (役職・官庁用語)、および *Istilah Pentadbiran* (行政用語) とを出しており、経済用語集は第3番目にあたる。言語文学局は、マレーシアのマレー語化政策の推進母体で、マレー語がすべての分野で支障なく使用できるよう必要な新語を作ったり、種々の出版物を出している。

用語集の専門委員会は、マラヤ大学の経済学部長 Ungku Abdul Aziz 教授(早稲田大学経済学博士)を中心に、マラヤ大学のスタッフ、実務家など18人の構成員(1人の中国人を除いては、すべてマレー人)によって、丸4年の検討を経て完成されたものである。その苦心の一部は、編纂方針を述べた序文にもうかがえるが、並大抵ではなかったであろうことが容易に想像される。あるいは、外国語の音をそのまま写し、あるいは2語を1語に縮少し、あるいは従来の意味を拡張してマレー語を使い、あるいは接頭辞、接尾辞を基幹語につけて抽象化し、あるいは巷間に使われる口語を取り入れたりして、造語を計っている。特に、インドネシア語との連関を求めるということはない。

例えば、その序文にある新造語を使った一文を紹介すると、

Sa harus-nya dengan pengalaman yang telah di-dapati dan juga tegoran² dari *keritik*² [critics] yang mungkin di-terima, *daya pengeluaran* [productivity] JKIE (Jawatan-kuasa Istilah Ekonomi) harus boleh menunjohkan *pulangan bertambah-lebeh* [increasing returns];

JKIE harus boleh menggubah bukan sahaja *kuantiti* [quantity] istilah yang *maksima* [maximum], tetapi juga menjaga supaya *kualiti* [quality] istilah² itu tidak jatuh. ([] 内およびイタリックは引用者)

語数は、1221語のマレー語用語が基本となっている。読者の便をはかって、修飾語からも引けるようになっている。例えば、*tuan tanah tidor* (不在地主) は、*tanah tidor*, *tuan* か *tidor*, *tuan tanah* かでも引ける。(前田 成文)

Gerald C. Hickey. *Village in Vietnam.* New Haven: Yale University Press, 1964. xxiii+325 p.

昨今、ベトナムに関する文献が雨後の筍のごとくに現われているが、それらはほぼ(1)国際政治・国際関係の観点からベトナムを扱ったもの、(2)軍事的分析を中心にしてベトナム戦争を扱ったもの、(3)ジャーナリストによる報告、著述、そしてここに紹介するような(4)ベトナム社会自体を直接の分析対象としたもの、などに分けうるかと思う。この第4番目のカテゴリーに属する文献は、ある意味では最も重要なものでありながら、きわめて数少ないのが現状である。

この書は、ベトナムの一村落(Khan Hau, サイゴン南西 55km, 1958年当時人口 3,241人)に関する民俗誌的な記録であり、筆者の理解する限りでは、同じ著者が、*The Study of a Vietnamese Rural Community: Sociology*, Saigon: Michigan State Univ., Vietnam Advisory Group, 1960. として出版したものを中心に、さらに何回かの追加調査を加えて完成したものである。

この書物の骨子を形成している諸資料は、1958年3月から1959年12月まで、文化人類学者の著者が、経済学者の J. Hendry, 政治学者の L. Woodruff とともに、ミシガン州立大学ベトナム顧問団支援のもとに、Khan Hau で行なった現地調査によって集められたものであり、巻末の文献目録にも見られる通り、他の2人の共同調査者も各々の専門分野でこの村落の調査報告を書いている。(J. Hendry, *The Study of a Vietnamese Rural Community* :

Economic Activities, Saigon: 1959; L. Woodruff, *The Study of a Vietnamese Rural Community: Administrative Activities*, 2 vols. Saigon: 1960.)

著者は、オリジナルのテキストに、他の2人の研究成果を加味して（生活様式と経済体系、村落行政と法律）、このメコンデルタにある一村落の全貌をミクロに描き上げようとしている。こうした、いわば息の長い研究は、動乱果てしない南ベトナムのような社会ではきわめて困難であって、序文を寄せたフランスのインドシナ研究の権威 Paul Mus が指摘しているように、今は古典となっている仏植民当時の研究成果との断絶を埋めるという意味でも、このモノグラフはきわめて貴重なものであると思われる。

内容は、結論の章をいれて全部で11章よりなり、(1)村の歴史、(2)地形と居住様式、(3)宗教と民間信仰、(4)血縁体系、(5)社会集団としての家族、(6)生活様式と経済体系、(7)村落行政と法律、(8)祭礼委員会、(9)社会経済的分化、(10)社会経済のプロフィールと社会移動、それに若干の附記がついている。各章とも、詳細を聞き取りおよび観察、短い歴史的説明、それに多数のケース・スタディを網羅してミクロな筆致が村落の生活を再現してゆく。専門項目が多岐にわたるために、もちろんここでは、その細目を紹介したり、評価したりすることはできないけれど、一つの小宇宙としてのこうした村落の生活全体のイメージを読者に伝えるという点では、この書物は、その希少価値というメリットを除いても、充分成功しているものであろう。

そこに描かれた村落住民の生活は、しかしながら、決して喜ばしいものではない。生活空間は狭く、技術が低いので生活は貧しく、人々は信心深い（というよりは迷信深い）。戦乱の絶えなかったこともあろうが、人々は村落レベルでさえ協同態勢を組織しえず、家父長家族と若干の信者グループ（カオダイ教の一派やマイノリティであるカトリック信者集団など）が成員の忠誠を吸収している。それは、例えば、家族単位の行事（冠婚葬祭や法事など）に全く家計とは不均衡な支出をするというような非合理的態度に現われたりする前近代的な生活なのである。

もしわれわれが一昔前の文化人類学者のように好奇心だけでこのような社会の問題を取り扱うことを

否定する立場に立つなら、この書物のもっている価値は、そうした意味での問題提起でさえあろう。望むらくは、本書のようなミクロな分析を全体社会レベルの諸研究（例えば、Nguyen Kien, *Le Sud-Vietnam depuis Dien-Bien-Phu*, 1963; Nghiem Dang, *Vietnam—Politics & Public Administration—1966* など）に繋いでゆく研究が輩出するように願うものである。

なお、一言不満を述べれば、煩雑であり、一般性もないので省かれたベトナム語（本文中の）の抑揚記号はつけておいてほしかった。（サイゴン出版のオリジナルでは、原語は正しく表記されている。）

（中野秀一郎）

陳孺性編「袖珍緬華辞典」ラングーン：イーセイイン出版社、1963. 519 p.

ビルマ語の辞書は今までに各種各様のものが知られているが、1963年に新しく緬華辞典が公刊された。本書は題名にもあるように、12×9cmの小型(袖珍)版である。

編者は、これとは別に「綜合緬華大辞典」、「模範緬華大辞典」の二種を編纂している。前者は、Robert Shafer, *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*. 1963. p. 7 に Sein, Chen Yee, *The Comprehensive Burmese-Chinese Dictionary, Mien-Hua Ta Tz'u-Tien*. Peking & Hongkong (at press), pp. ca. 2000 と紹介されているものであるが、鹿児島大学の荻原弘明助教授の書簡によれば、これは編者が15年かけてまとめたが未刊だとの事である。その abridged edition が「模範緬華大辞典」で、1962年に出版されたが早くも絶版になっており、駐ビルマ日本大使館の石堂事務官からの連絡によれば、ラングーン市内でさえも残念ながらもはや入手不能だという。

従来の各種ビルマ語辞典の内、内容的に最も充実しているのは、*Judson's Burmese English Dictionary*; revised & enlarged by R.C. Stevenson & F.H. Eveleth. Rangoon: 1953. p. 1061. であるが、袖珍辞典はページ数からいってもこのジャドソン辞典の半分、収録語彙数からいっても1/3足らずにすぎないというものの、ジャドソン辞典に収録されていない単語や語句、ことに＜血液銀行＞＜水